



通信

HP 学校だより
R6. 6. 27
NO. 14
文責 伊藤美佳



生き物を育てること

最近、低学年では生き物を飼うことがブームです。トカゲ、ダンゴムシ、ザリガニ…たくさんの生き物が教室で飼われています。自分のペットのように感じて育てている子どもたちは、家から学校に持ってきて、始終様子を見ています。下校時には大事そうにケースを抱えて帰ります。

実際に生き物を育てることで、その生態をしっかりと学ぶことができます。「何飼っているの」「エサは何」「どんなところにいるの」などと質問するとすぐに答えが返ってきます。質問の答え以上のことを教えてくれる子もいます。子どもの知識欲は無限だと感心させられます。

生き物を育てていると、「生」と「死」を身近に感じる場面に出会います。昔なら、家畜が近くにいてとか、家で魚をさばく場面を見るとか、子どもたちの周りには、「生」と「死」を感じる場面が多く存在していました。生き物を飼うことで、「卵がふ化してうれしい」と「生」に喜びを感じる場面や「飼っていたダンゴムシが死んじゃった」と「死」を悼み悲しむ場面に出会うことが心の発達の上で大きな役割を果たすことなのでしょう。ゲーム中での「死」と現実の「死」の違いをきちんと分かる豊坂っ子であってほしいと願います。しかし、安易に子どもたちの口から「死ね」という言葉が出てくる事実を否めません。相手がいるのにその言葉を言ったら「どう思う」「どう感じる」という想像力が乏しくなっている現状を重く受け止め、周りの大人が子どもたちとともに立ち止まり、その言葉の意味を深く掘り下げる作業をしていかなければいけないと感じます。

「捕まえたエビが死んじゃったから、埋めてくるね。」と伝えに来てくれる、そんな豊坂っ子が人に対して「死ね」という言葉を浴びせることがないことを信じています。

まずは、大人が見本を見せていかないといけませんね。

好きな事、得意な事を伸ばす

25日(火)の「さわやか集会」は、初めての取り組みを試みました。絵の得意な子に好きな絵を描いてもらい、その絵を縦割り班で鑑賞するというものです。

好きな事、得意な事をみんなに認めてもらおうと自信となり、もっとうまくなりたい、もっとできるようになりたいという意欲につながります。今回、初めて企画したものでしたが、絵の得意な子にとっては、多く人に見てもらってうれしかったのではないかと思います。次の企画では、何が得意な子どもたちにスポットが当たるか楽しみです。

今回の企画では、絵を見るのに時間がかかりすぎ、集会の時間をオーバーしてしまったことが問題点でした。集会委員会では、しっかり考えて案を作り、リハーサルをした企画だったと思います。しかし、全校を動かすということの難しさが、やってみて初めて分かったのではないのでしょうか。今回の課題を次回に生かし、「どうしたら時間内にできるのか」「どういう方法をとればみんなが楽しめるのか」と新たな視点をもって企画できるようにしてくれることを期待します。何事もやってみることでよりよい方法を見つける視点が生まれます。豊坂っ子が、一步一步成長してくれることを願っています。